立正大学博物館 館報

万吉だより

MA GECHI NEWS

第 28 号 平成 30(2018) 年 3 月

礫石経の不思議

館長　時枝　務

今回の特別展で取り上げる「礫石経」は、写経でありながら、経典のテキストとして使えない不思議な経典である。

今回展示したものは、多字一石経が主体であるため、ある程度は経典の内容を知ることができるので、そのことを実感しにくいかもしれない。それでも、読めない部分が少なくないことは、実物をみればすぐに気付くであろう。そもそも凹凸のある自然石の表面に、筆で経文を書くのであるから、均一な線で文字を書くことができないわけで、読みづらくなるのは当然である。しかも、表側だけでなく、裏側にも文字を書いており、どこがどこに連続するのかわからない部分もある。

より顕著な例は一字一石経である。小さな石に一文字だけ書写した経典であり、表側にのみ書写する場合もあれば、裏面にも書写する場合もある。手本となる経典をみながら写経するわけであるが、石を動かした途端に経文の文字の順序が乱れ、経典として読誦することができなくなる。経典が、読誦するためのものであるとすれば、礫石経はまったく役に立たないことになる。

このように、礫石経は、いわば読めない経典である。供養に際しては、読経がなされたと推測されるが、少なくともその読経に礫石経は参照されなかったことは確かである。とすれば、礫石経は、経典のテキストではなく、なにか別の目的をもっていると考えざるを得ない。それはどんな目的なのか。

答えは、遺跡から出土した礫石経のあり方にあり、発掘調査された事例から真相に迫ることができる。多くの礫石経塚からは多量の経石が出土するが、そのうち数割に文字がないという事実が、多数報告されているのである。経石に文字がないとはどういうことか。一瞬唖然としてしまう事実であるが、そこには深い意味が隠されており、礫石経塚を造営した人にとっては自明のことであった。文字が書かれた真正の経石も、文字のない怪しい小石も、一緒に分け隔てなく経塚に埋納されているのである。そこでは、経石も小石も同列に扱われており、経石を重視した形跡はみじんもない。

それは、経石と一緒に供養すれば、小石もただの石ではなくなり、聖なる石となれることを意味する。経石の写経が済んだ後、経石と小石をともに供養し、箱や袋に納め、地中に納めるなどする。ともに供養した時点で、経石の呪力が小石に及び、小石も呪力を獲得するのである。

つまり、礫石経が信仰された最大の理由は、それが石だからである。おそらく、礫石経が誕生する以前から石への信仰があり、それをもとに礫石経の信仰が成立したのである。当然、礫石経に使用される石は、選ばれた石であり、聖性を付与するにふさわしいと考えられた石である。呪力をもつ石である。扁平な丸みを帯びた小石が好まれるのも、清浄な小石に対する人々のイメージに起因していると推測できるが、今回の展示品のほとんどはそうしたイメージから逸脱しているかもしれない。

礫石経についてはまだまだわからないことが多い。今後の研究が大いに期待されるのである。

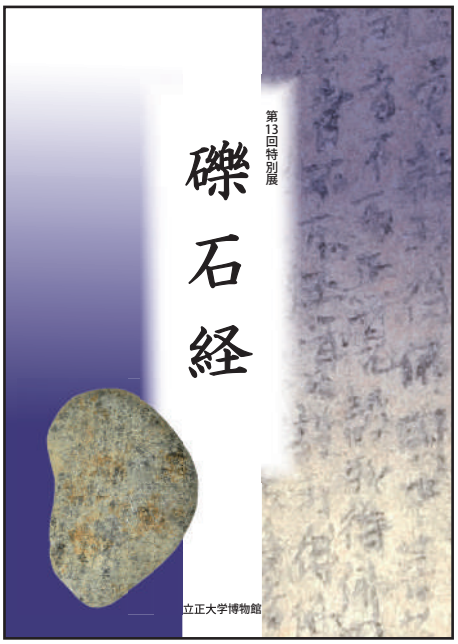
第 13 回特別展のお知らせ

平成 31 年 2 月 22 日（金）から 3 月 28 日（木）を会期として、立正大学博物館第 1 展示室にて第 13 回特別展『礫石経』を開催します。

展示する資料は、平成 29（2017）年 7 月 20 日、山口県下関市在住の熊野譲氏よりご寄贈いただいた礫石経 29 点（うち 1 点寄託）です。本資料は平成 28（2016）年 3 月、山口県防府市大崎江良に所在する熊野家墓所にて墓石の整理作業の際に出土しました。江良地区は、西目山地と楞厳寺山地の間に源をもつ須川によって形成された谷状地形と平野部が接する地域です。墓地のある弘法山は平野部から標高 28.6m の丘状の小山で、周辺には古墳が多く確認されています。

末法思想が盛んだった平安時代と比べ、中世にはいると「埋経」という行為は仏教における奉納や供養を重視したものに変化し、法華経などを書写し塚を築く「経塚」が広まりました。

一方、12 世紀末頃に出現した礫石経は基本的に小石に経文を墨書ないし朱書したもので、片面と両面のものがあります。また、一字の場合もあれば、多字の場合もあります。



第 13 回特別展

今回の特別展を通して新資料である熊野家墓所出土礫石経を広く公開するとともに、礫石経に籠められた信仰と歴史について考える深く考える機会となれば幸いです。

なお、本展示は平成 31 年 4 月より品川キャンパスに巡回する予定です。

礫石経出土地点

熊野 譲氏

発見時の様子（1）
（熊野譲氏 提供）

発見時の様子（2）
（熊野譲氏 提供）

発見時の様子（3）
（熊野譲氏 提供）

面 1　面 2　面 3　面 4

面 5

礫石経（No. 1）

吉田格コレクション 貝取貝塚の出土遺物について

一関市博物館
鈴木弘太

はじめに

ここで紹介するのは吉田格コレクションの内、岩手県一関市花泉町に所在する貝鳥貝塚の出土品 10 点と、貝鳥貝塚に隣接する白浜貝塚の出土品 2 点です。

筆者が勤務する一関市博物館では、平成 31 年 1 月 26 日から 3 月 24 日まで、展覧会「縄文人のセンス―貝鳥貝塚の出土品―」を開催いたしました。その事前調査で、立正大学博物館が所蔵する吉田格コレクションの資料調査を実施し、さらには、これらの出土品をお借りし、展覧会へ出品させていただいています。ここで紹介する出土品は、すなわち展覧会への出品ということになります（一関市博物館 2019）。

ところで遺跡名称は、吉田格コレクションでは「貝取貝塚」、展覧会では「貝鳥貝塚」の漢字を当てています。当該遺跡は、他にも「油島貝塚」や「蝦島貝塚」などと呼ばれたりしますが、昭和 41 年の岩手県の史跡の指定名称が「貝鳥貝塚」となったことから、現在は「貝鳥貝塚」が一般的です。

1．貝鳥貝塚の位置と概要

貝鳥貝塚は一関市花泉町に所在します。北東側から延びる丘陵の端部に位置し、海抜は 15 ～ 20 m程度、周辺の水田との標高差は 5 ～ 10 mほどあります。遺跡の両側には、南側には北上川の支流である迫川が流れ、北側には磯田川があり、この迫川に合流します。貝鳥貝塚は、丘陵南側斜面に位置し、丘陵脇は小河川に囲まれる絶好のロケーションと言えるでしょう。

図 1 は縄文海進期の貝鳥貝塚周辺の汀線の復原図です。縄文海進期には、約 5m 海抜が上昇していたといわれていますが（松島 2012）、さらに 3m ほど足して、現在の海抜から 8m ほど海抜を上昇させた図です（註 1）。足した分の 3 mは、地盤沈降があったものと推測されます。この汀線復原図からは、現在の石巻湾から北上川に沿うように大きく内海が入り込んでいたことがわかります。その内海は潟を形成し、周囲には縄文集落が営まれ、貝塚が形成されました。本稿で紹介する貝鳥貝塚や白浜貝塚もその一つです（熊谷 2007）。

貝鳥貝塚は、昭和 30 年代から 40 年代を中心に発掘調査が行われ、現在では岩手県の指定史跡となっています。昭和 30 年代の調査では、岩手大学や東京大学人類学教室が主体となり発掘調査が行われ、60 体を超える縄文時代後晩期の人骨が発見され、特に人類学方面から注目を集めました。出土した縄文人骨の大部分は現在、国立科学博物館に収蔵されていますが、地元の満昌寺にも良好な状態の縄文人骨一体が納められています。

これまでの調査成果により貝鳥貝塚は、縄文中期中葉頃から貝層が形成されはじめ、後期には規模を拡大し、その後縮小しながらも晩期まで存続することが確認されています。貝層の範囲は東西約 60 m、南北約 20 m、遺物包含層は厚いところでは 2 mにも達し、内陸部に所在する貝塚としては国内最大級の貝塚であることが判明しています。

白浜貝塚は本格的な調査は実施されていませんが、岩手県教育委員会が実施した試掘調査では、縄文時代後期前葉から弥生時代の貝塚とされ、貝鳥貝塚と同時期に機能していたと考えられています（岩手県教育委員会 1998）。

2．吉田格コレクション収集の経緯と内容

岩手県の史蹟名勝天然記念物調査会の一員であった小田島禄郎氏が、大正 14 年に白浜貝塚を、昭和 4 年に貝鳥貝塚を踏査しています。これがはじめての学術調査です。

そして、昭和 15 年 7 月に江坂輝弥と吉田格の両氏は、貝鳥貝塚の踏査を実施し、その後、昭和 22 年 10 月に両氏によって、はじめて貝鳥貝塚の発掘調査が実施されました。僅か二日間の小発掘ですが、その後の本格的な調査の礎となる貴重な調査です。

この時の資料が、10 点の貝鳥貝塚出土品で、内訳は、復原土器 1 点、土器片 8 点、骨角器 1 点です（写真 1）。1 は、縄文時代晩期（大洞 A ´ 式）の深鉢

形土器（高 41cm）です。その後の貝鳥貝塚調査では、晩期の遺物は少量であるため、貴重な成果です。2 ～ 9 は小片のため、詳細は未詳ですが、2,3 は深鉢形土器、4 ～ 9 は縄文時代晩期の浅鉢形土器と考えられます。浅鉢形土器は丁寧な磨きがなされており、口縁部下の沈線は工字文と考えられ、1 と同時期のものと推測されます。10 は猛禽類（ワシ・タカ類）の趾骨を加工した垂飾品（長 3.6cm）で、採集資料です。同様のものは、昭和 31 年度調査でも出土しています。

写真 2 は白浜貝塚の資料で、吉田氏が地元の方から譲られたものです。1 は土製耳飾りで、直径 4.3cm、厚 3cm、重量 76 g でズッシリとしています。表面には刺突文と円形文が環状に三重に施されています。2 は鹿角製臼形弭で、いわゆる「浮き袋の口」です。長 2.4cm、最大径 1.5cm で表面に丹塗が施されています。実測図は『吉田格コレクション　考古資料図録』から転載しました（立正大学文学部考古学研究室 1990）。

おわりに

本稿では吉田格先生が調査された貝鳥貝塚及び白浜貝塚の資料について紹介させていただきました。特に貝鳥貝塚の資料は、初めて発掘調査のメスが入れられた記念すべき調査資料であり、本稿及び展覧会で紹介することができたのは、うれしい限りです。ただ、借り受けてから展覧会開幕まで、常に展覧会準備に追われ、実測図や拓本を掲載することができなかったことは心残りです。

展覧会及び本稿の執筆にあたっては、立正大学博物館の時枝務館長及び吉水美紗登専門員には大変お世話になりました。また盛岡大学文学部長　熊谷常正教授には、日頃よりご指導いただいています。記して感謝申し上げます。

註 1）『改訂新版カシミール 3 D パーフェクトマスター編』（杉本智彦 2012　実業之日本社）を用いて編集しています。なお、汀線復原図は、現行（圃場整備後）の地形図を用いて作成しているため、当時はより微地形に起伏があったものと想定されます。

参考文献

一関市博物館 2019『縄文人のセンス―貝鳥貝塚の出土品―』
岩手県教育委員会 1998『岩手県文化財調査報告書第 102 集　岩手の貝塚』
熊谷常正 2007「岩手県貝鳥貝塚の鳥形土製品」『考古学の深層―瓦吹堅先生還暦記念論文集―』
松島義章 2012『貝が語る縄文海進―南関東、＋ 2℃の世界　増補版―』有隣堂

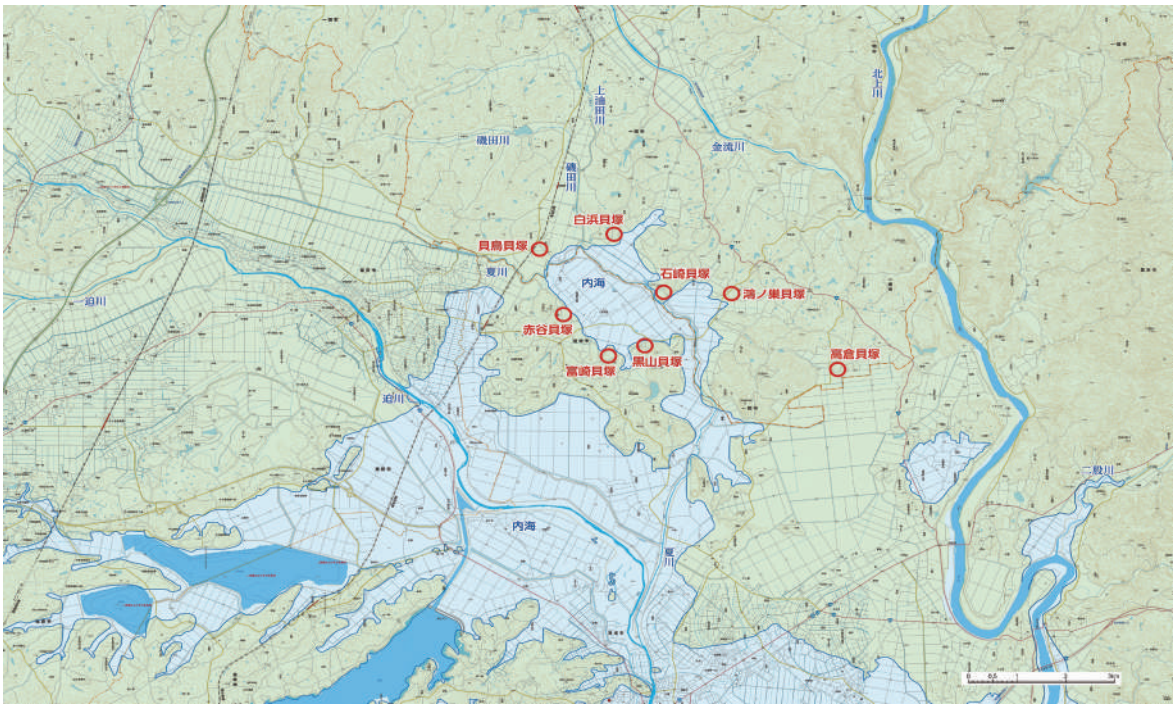


図 1　縄文海進期の貝鳥貝塚周辺の汀線復原図

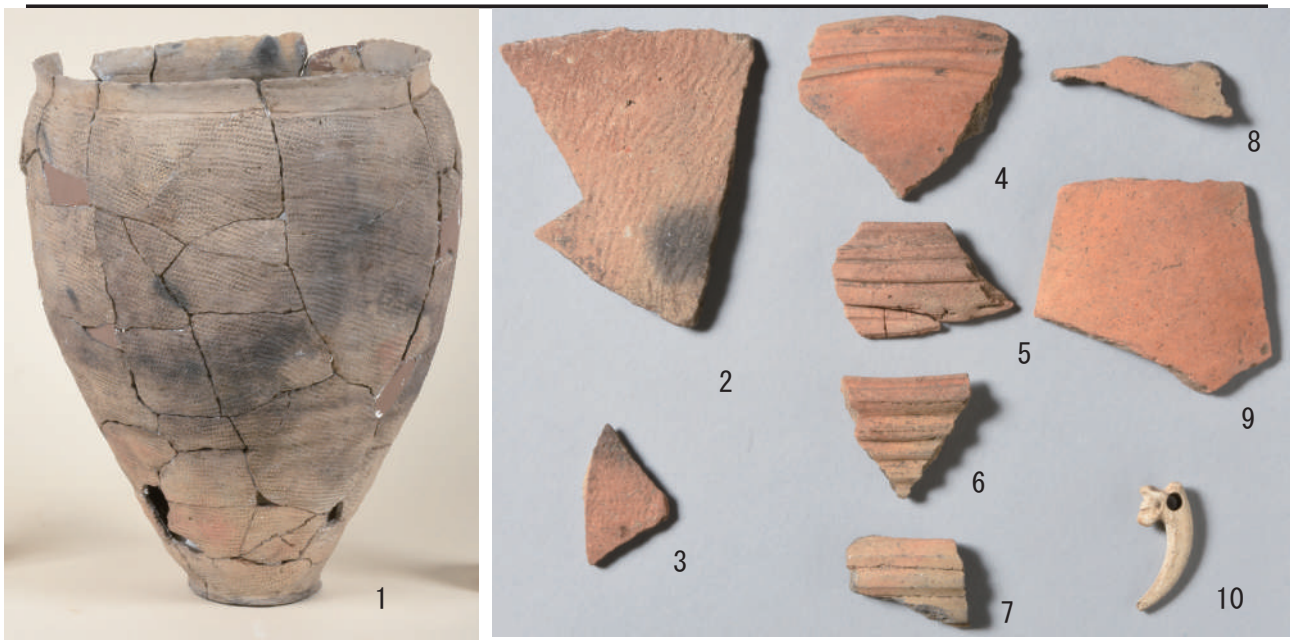
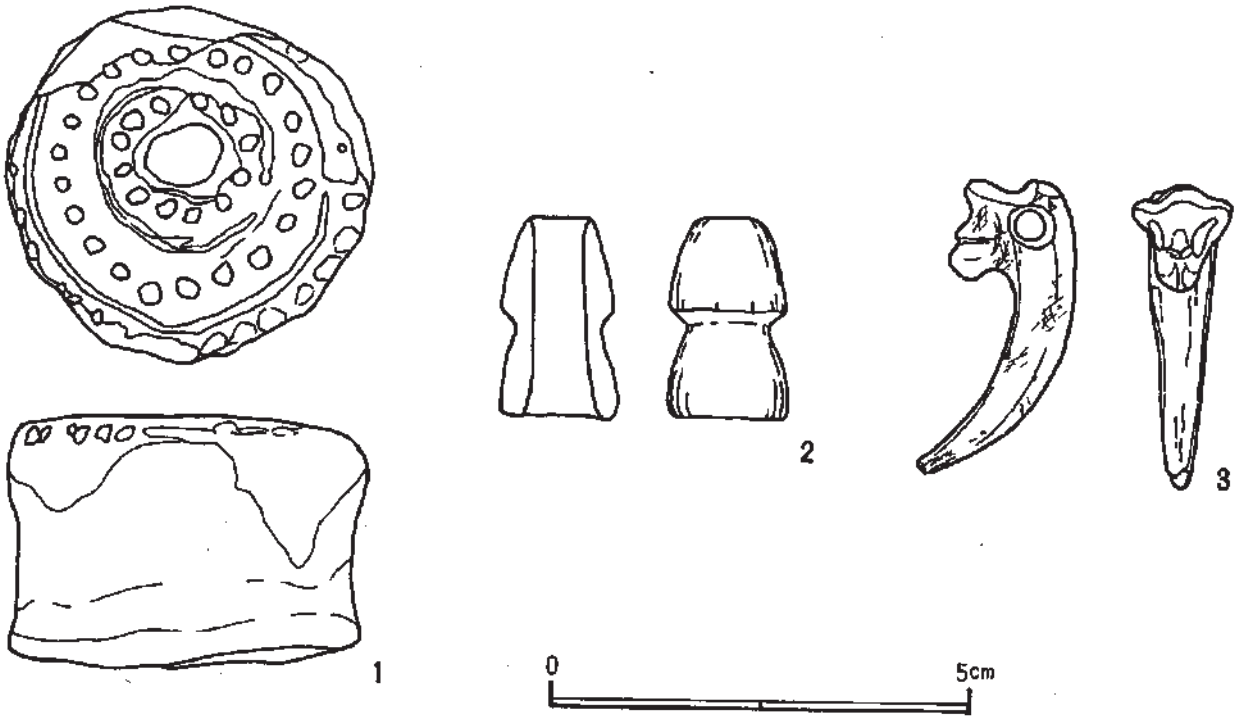


写真１　貝鳥貝塚出土遺物

写真２　白浜貝塚出土遺物



１図２　実測図（1, 2 白浜貝塚、3 貝鳥貝塚）

NEWS

資料活用

平成 30 年 10 月 1 日から平成 31 年 2 月 28 日までの期間に、当館所蔵の資料を以下の博物館等に貸出を行ないました。

①上高津貝塚ふるさと歴史の広場
貸出資料：花輪台貝塚出土資料、城ノ台北貝塚出土資料、貝柄山貝塚出土資料
貸出期間：平成 30 年 10 月 13 日（土）～ 12 月 2 日（日）
利用目的：第 21 回企画展「霞ヶ浦の誕生と貝塚－縄文海進期の人々の暮らし－」において展示するため。

④池上本門寺霊宝殿
貸出資料：徳治三年銘題目板碑
貸出期間：平成 30 年 12 月 20 日（木）
～平成 31 年 3 月 15 日（金）
利用目的：霊宝殿特別展「大国阿闍梨日朗聖人」において展示するため。

⑤一関市博物館
貸出資料：貝取貝塚出土資料、白浜貝塚出土資料
貸出期間：平成 30 年 12 月 21 日（金）
～平成 31 年 4 月 15 日（月）
利用目的：テーマ展「縄文人のセンス」にて展示するため。

⑥板橋区立郷土資料館
貸出資料：赤塚城址貝塚出土資料
貸出期間：平成 31 年 1 月 9 日（水）～ 3 月末日
利用目的：平成 30 年度企画展「再発見！いたばしの遺跡－いたばしの旧石器時代・縄文時代－」において展示するため。

土器焼き実習

土器焼きは例年、文学部史学科の「考古学実習 6」の一環で行われています。今年度も、平成 30 年 11 月 3 日（土）・4 日（日）の 2 日間、博物館が協力し、熊谷キャンパス敷地内において行われました。
参加者は、考古学専攻生 6 名、考古学研究会会員 2 名、計 8 名で講師の竹花宏之先生の指導の下、野焼きで土器を焼成しました。

土器は、品川キャンパスにおいて製作し、乾燥を十分に行ったのち、博物館に搬入し焼成しました。

考古学専攻生と完成した土器

お知らせ

【特別展案内】
立正大学博物館 第 13 回特別展 「礫石経」展

会　期：平成 31 年 2 月 22 日（金）から 3 月 28 日（木）
場　所：立正大学博物館第 1 展示室
時　間：10 時～ 16 時
入館料：無　料
休館日：火曜・日曜・祝日・大学休業日

※　詳細は当館 HP を御覧ください。
URL ： http://www.ris.ac.jp/museum/

見学者の声

当館に寄せられたご意見・ご感想をご紹介致します。今後とも、皆様の声を博物館運営や展示に反映できるよう務めてまいります。貴重なご意見・ご感想をありがとうございました。

◆興味ある展示ありがとうございました。来校するたびに新しい刺激をうけています。

（60 代　男性・茨城県）

◆ 本物の化石を見たことがなく、アンモナイトを見たときはその大きさに驚いた。

（20 代　男性・埼玉県）

◆沙漠に対して無知であったことに気づくとともに、学ぶことが出来てよかった。

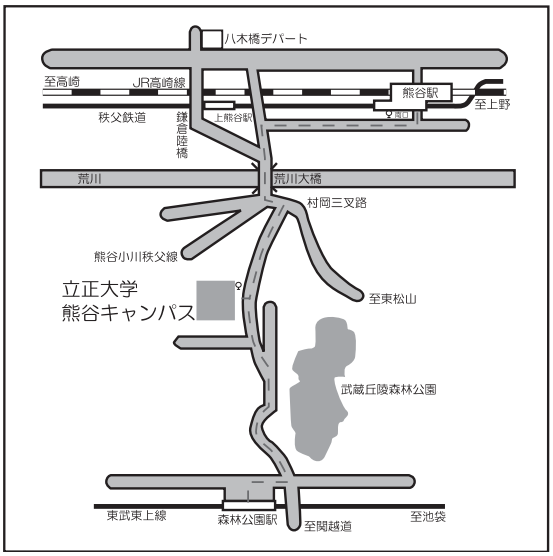
（40 代　男性・群馬県）

◆ 地理学科 OB として懐かしく感じました。

（40 代　男性・愛知県）

利 用 案 内

所在地：〒 360-0194　埼玉県熊谷市万吉 1700
立正大学熊谷キャンパス内
TEL　048 － 536 － 6150
FAX　048 － 536 － 6170
開館日：月・水・木・金・土曜日（大学休業中を除く）
開館時間：　10：00 ～ 16：00
※詳細につきましては、博物館ホームページをご覧下さい。
交通機関：
① JR 高崎線、北陸新幹線、秩父鉄道「熊谷駅」下車。南口より立正大学行バス（国際十王交通）で約 10 分。
②東武東上線「森林公園駅」下車。北口より立正大学行バス（国際十王交通）で約 12 分。
お問い合わせ：博物館または熊谷総務部総務課
（048-536-6010）にご連絡下さい。



あ と が き

今年度、立正大学博物館では地球環境科学部開設 20 周年を記念した企画展を開催しました。会期中、同学部の同窓生の方々にご来館いただき沢山の思い出話を聞くことができました。皆さん、青春時代へと戻ったように楽しそうにお話されていたことが印象的でした。

次年度も多くの方のご来館を心よりお待ちしております。

題字揮毫　田 淵 観 斎（立正大学名誉教授）

立正大学博物館館報　万吉だより　第 28 号
平成 31（2019）年 3 月 1 日発行
編集・発行　立正大学博物館
〒 360-0194　埼玉県熊谷市万吉 1700
TEL 048 － 536 － 6150
FAX 048 － 536 － 6170
E-mail ： museum@ris.ac.jp
URL ： http://www.ris.ac.jp/museum/index

（印刷：アサヒコミュニケーションズ）